

図16 不特定/不定期の相手とのオーラルセックス(自分がする側)

Kruskal Wallis test,  $p < .078$

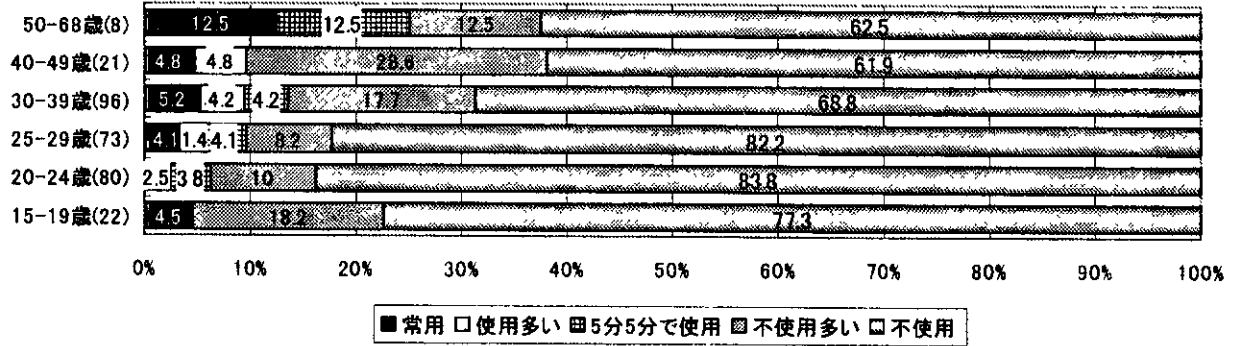


図17 不特定/不定期の相手とのオーラルセックス(自分がされる側)

Kruskal Wallis test,  $p < .066$

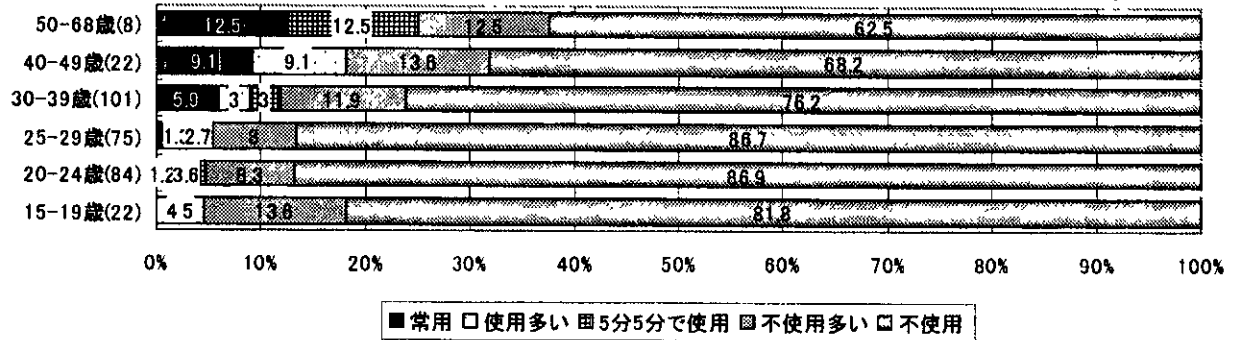


図18 不特定/不定期の相手とのアナルインターコース(自分が挿入する側)

Kruskal Wallis test,  $p < .135$

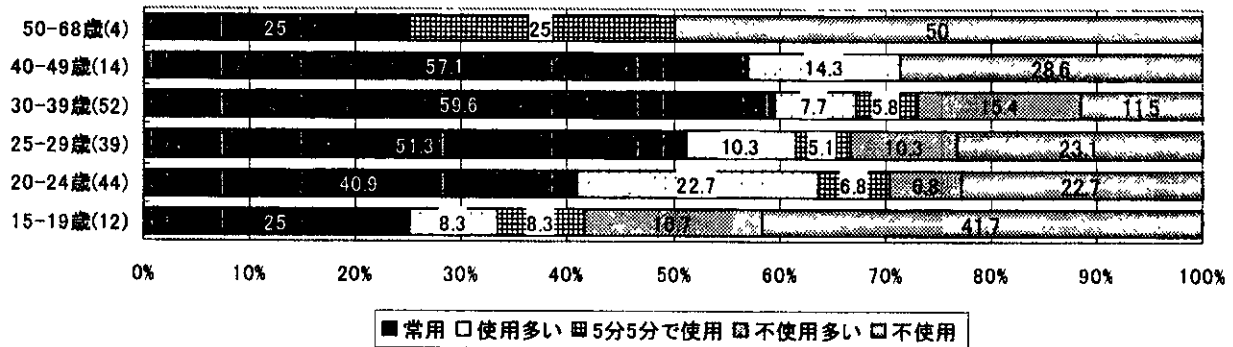
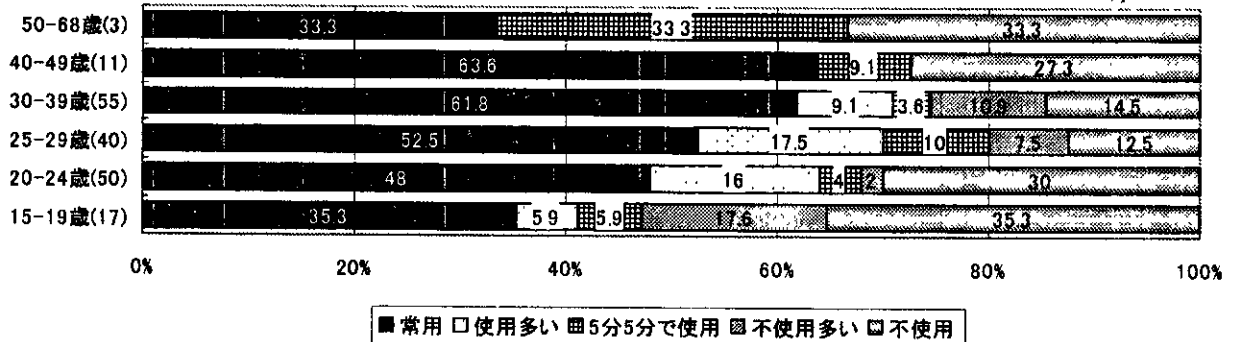


図19 不特定/不定期の相手とのアナルインターコース(自分が挿入される側)

Kruskal Wallis test,  $p < .259$



【滞日外国人グループ：在日ラテンアメリカ系住民の HIV/STD 関連知識・行動及び予防・支援対策の開発に関する研究（ラテン・プロジェクト）】

岩木エリーザ (CRIATIVOS)、木原雅子 (京都大学)、津島真利絵 (CRIATIVOS)、柴ロルイサ (CRIATIVOS)、木原正博 (京都大学)、市川誠一 (神奈川県立衛生短期大学)、大屋日登美 (神奈川県立衛生短期大学)

研究協力：

者柴田イナシオ (ブラステル)、豊村ネルソン (JB コミュニケーション)、リカルド・ジメネズ (JB コミュニケーション)、岩瀬ロザンジェラ (Preserv-Ativos)、山崎パウロ (Preserv-Ativos)、前田政行 (前田貿易)

## 概要

1998年の在日ラテンアメリカ系市民（在日ブラジル人、在日スペイン語系市民）一般を対象に「HIV/STD 関連の知識・態度・行動に関する」ベースライン調査を行い、その結果を基に、ポルトガル語・スペイン語マスメディアを通して、知識のギャップを埋める目的として、第1次予防介入を行った。しかし、そのギャップは期待通りには埋まらず、第2次予防介入の必要性を認めた。

そして、在日ブラジル人を対象に新たな予防介入方法などを模索をしたところ、経験豊富、かつマーケティングのプロが集まるブラジル国のエイズ対策局とパートナーシップを結成し、2000-2001年には第2次の予防介入が企画され、2002年に実施された。

また、個別対策として、在日ブラジル人向けの学校を対象に HIV/STD 予防介入プログラムのパイロット研究を行った。ワークショップおよび講演会の2つの方法で介入を行い、その効果を調べた。

さらに、在日ラテンアメリカ系市民の中から予防介入の実施にあたる人材を育てるため、最も効果的な予防活動人材育成研修の実施とその評価を行った。

次に、在日ラテンアメリカ系市民におけるコンドームの使用率をあげるため（「いつも使用」の率：40-60%）、日本国内で販売されているコンドームに対し、在日ラテンアメリカ系市民がどのような印象を持っているか、購入状況、最も望ましい製品などを調べ、コンドームの入手へのバリアーを取り除くことを目的とし「ソーシャルマーケティング法によるコンドームの普及」に関する研究を行った。

そして、在日スペイン語系市民を対象に第2次予防介入を行うためのベースライン調査を行った。

上記、5つ研究について現在の段階までの分析などについて報告する。

## 背景・目的

1990年、わが国の政策による入管法の改正より、日本からの呼びかけ、また母国の経済的な理由を背景に、ラテンアメリカ諸国から日系人を中心に多くの人々が来日し、現在、在日ラテンアメリカ系市民コミュニティは32万人までに急増した。

在日ラテンアメリカ系市民は、日本の代表的なマイノリティ集団の一つであり、かつ言

語、文化面での障壁のため、日本の主流社会から疎外された存在となっている。

疎外されたグループでは、一般に、それに伴う不利益のために HIV への脆弱性 (vulnerability) が高まることが知られており、かつ、ラテン・アメリカ各国の HIV/AIDS の流行状況を考えると、いかにこのコミュニティが HIV/AIDS に対して vulnerable であ

るかは明らかである。また、日本国内の HIV/AIDS 動向を見ても、感染者が年々増加し、当コミュニティはこの 2 つの流行にさらされていることが考えられる。

また、日本の HIV/AIDS サーベイランス報告によると、当コミュニティは総人口の約 0.24% しか占めないが、HIV 感染者の 3.6%、そして、AIDS 患者の 5.8% を占める。さらに、外国籍の HIV 感染者数の 12%、そして、AIDS 患者数の 25% を占める。

我々はこうした認識に立って、1996 年以来、在日ラテンアメリカ系市民における効果的な HIV/AIDS 予防・ケアの対策モデルを構築するために、予防介入研究を実施してきた。

在日ブラジル人については、1998 年の第 1 回の「HIV/STD 関連の知識・態度・行動に関する」ベースライン調査を行い、その結果を基に、知識のギャップを埋める目的として、第 1 次予防介入を行った。しかし、そのギャップは期待通りには埋まらず、第 2 次予防介入の方法を模索した。そこで、第 2 次予防介入は予防キャンペーン経験に豊富、そして、世界でモデル的エイズ政策を持っている、ブラジル国のエイズ対策局とパートナーシップを結んで、2002 に新たな予防介入が企画され、実施された。

また、個別対象として、ブラジル人学校を対象に予防介入を行い、ワークショップ式と講演会式の効果の比較を行った。

そして、予防介入の実施にあたる効果的な人材育成研修を見出す為、研修の実施とその評価を行った。

さらに、在日ブラジル人コミュニティにおけるコンドームの使用率をあげるため(「いつ

も使用」の率:40-60%)、対象者が日本国内で売られているコンドームに対しどのような印象を持っているか、購入状況、最も望ましい製品などを調べ、コンドーム入手へのバリアーを取り除き、コンドーム使用率の上昇を目的として、「ソーシャルマーケティング法によるコンドームの普及」に関する研究を行った。

在日スペイン語系市民については、2001 年末時、約 6 万 5 千人が外国人登録され、そのうち、約 1 万人が超過滞在者である。超過滞在者の場合、言葉や文化の障壁に加えて、生活を守る為に匿名性を維持し、それがさらに主流社会から疎外されることにつながり、HIV 感染への vulnerability がさらに拡大すると考えられる。

当コミュニティを対象に、1998 年に「HIV/STD 関連の知識・態度・行動」に関するベースライン調査及び、第 1 次予防介入を実施したが、主に 30 代女性のみにはキャンペーンが浸透せず、2002 年には第 2 次予防キャンペーンの企画の為、新たにアンケート調査を行った。

以降、2002 年度に行われた 1) 在日ブラジル人を対象に第 2 次予防介入の実施；2) 在日ブラジル人学校を対象にスクールベースパイロット予防介入；3) 在日ブラジル人を対象にソーシャルマーケティング法によるコンドームの普及に関する研究；4) 在日ラテンアメリカ系市民における HIV 関連の予防活動者育成研修に関する研究；そして 5) 在日スペイン語系（主にペルー国籍）を対象に HIV 関連知識・行動についてのベースライン調査；この 5 つの研究について、現在までの分析による結果を報告する。

## 1 【在日ブラジル人を対象に第 2 次予防介入に関する研究】 ※日伯プロジェクト

この研究は在日ラテンアメリカ系一般市民における HIV 関連の知識、行動などの変化を調べ、その変化に添った効果的なマスメディア予防キャンペーンの製作し、実施するのを目的とする。

### ベースライン調査の方法

平成 14 年 10 月に在日ブラジル人が集まる 4 ヶ所で連続的にその日の来場者に（高齢者

及び、子供を除いて）アンケート調査の依頼をした。アンケート調査はブラジル銀行東京支店、群馬県大泉町のブラジリアン・プラザ・ショッピング・モール、ブラジル銀行名古屋支店、そして、愛知県小牧市のショッピング・ヴィラ・ノヴァ・ショッピング・モールで行った。

### ベースライン調査の結果

「回収率・属性」

合計回答者が 563 人、回収率は約 79% から 88% であった (表の 1)。性別構成は女性が 41.6%、そして男性が 58.4% (男女比率—男 1.41 : 女 1) であった (表の 2)。また、年齢及び滞在期間について 20 才から 39 才の回答

者が最も多く、合わせて回答者の 71.7% を占め、平均年齢は 30.67 才 (±10.45) であった。また、滞在期間に関しては 6 年以上日本に滞在しているものが約 42% で、平均滞在期間は約 6 年 (±約 4 年 5 ヶ月) あった (表の 3、4)。

(表の 1)

2002 年 HIV/Aids/STD 関連の知識・行動調査 「回収率 (%)」			
	依頼数	回答数	回収率
ブラジル銀行 [東京]	152	132	86.84
ブラジリアン・プラザ [小泉町]	161	136	84.47
ブラジル銀行 [名古屋]	174	154	88.51
ヴィラノーヴァ [小牧]	177	141	79.66
合計	664	563	84.79

(表の 2)

2002 年 HIV/Aids/STD 関連の知識・行動調査「男女構成」		
	件数	%
女性	229	41.60
男性	322	58.40
不明	12	
サンプル数	563	551

(表の 3)

2002 年 HIV/Aids/STD 関連の知識・行動調査年 「年齢分布」		
	件数	%
19 才未満	48	8.6
20~29 才	230	41.4
30~39 才	168	30.3
40~49 才	78	14.1
50~59 才	29	5.2
60 才以上	2	0.4
不明	8	
サンプル数	563	555
平均値	30.67 ± 10.45	

(表の 4)

2002 年 HIV/Aids/STD 関連の知識・行動調査 「滞在期間分布」		
	件数	%
1 年未満	40	7.1

1-2年	66	11.8
2-3年	64	11.4
3-4年	51	9.1
4-5年	56	10.0
5-6年	47	8.4
6年以上	236	42.1
不明	3	
サンプル数	563	560
平均値	72.47±52.49	

「一般情報の獲得状況」

日本におけるポルトガル語による一般情報の獲得状況について、有料チャンネルのポルトガル語で放送される IPCTV が最も多く (68.0%)、その次が日本で発行されているポルトガル語の週刊新聞であった (57.6%)。そして、インターネットを情報源としているものが 45.6% も存在し、ポルトガル語の雑誌が 48.7% であった。また、日本語で情報を得るものが 15.2% であった [表の 5]。

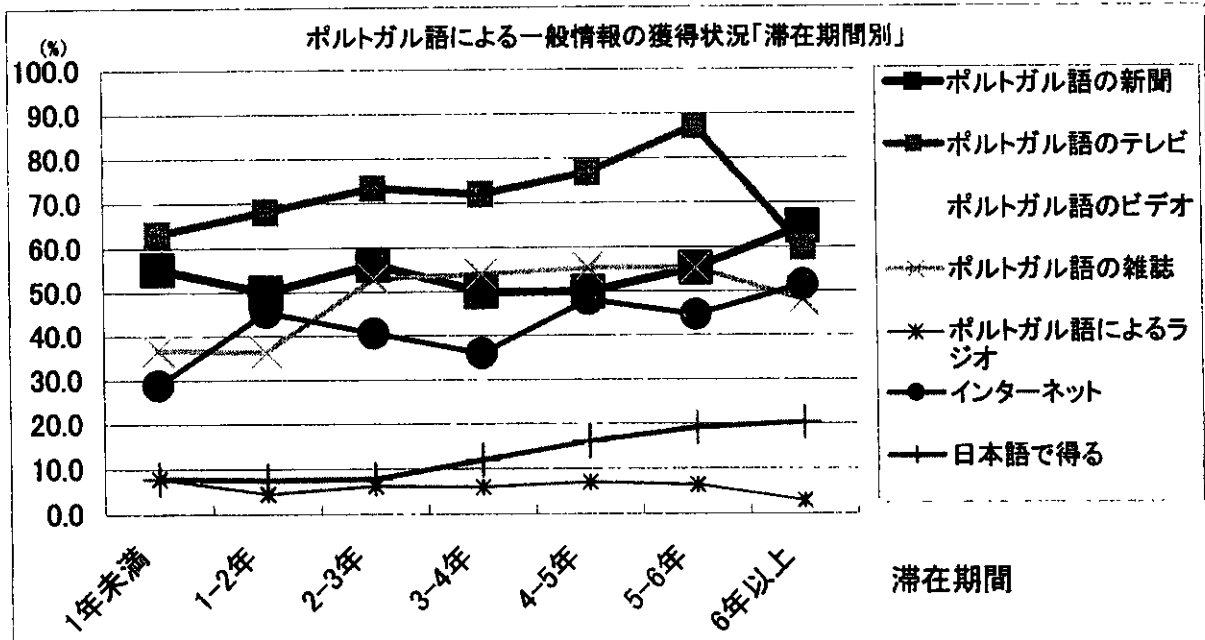
さらに情報源を滞在期間別の分析により、滞在年数が増えるにつれ情報源が変わってい

くことが示された。ポルトガル語のテレビとインターネットを情報源としているもの、また日本語で情報を得るものが増加する (図の 1)。また、情報源を年代別で分析を行うと、年齢が高くなるほどテレビ、インターネット、雑誌、ビデオなどを情報源とする回答者が少なくなり、ポルトガル語の新聞と日本語で情報を獲得するものが増加することが明らかになった (図の 2)。

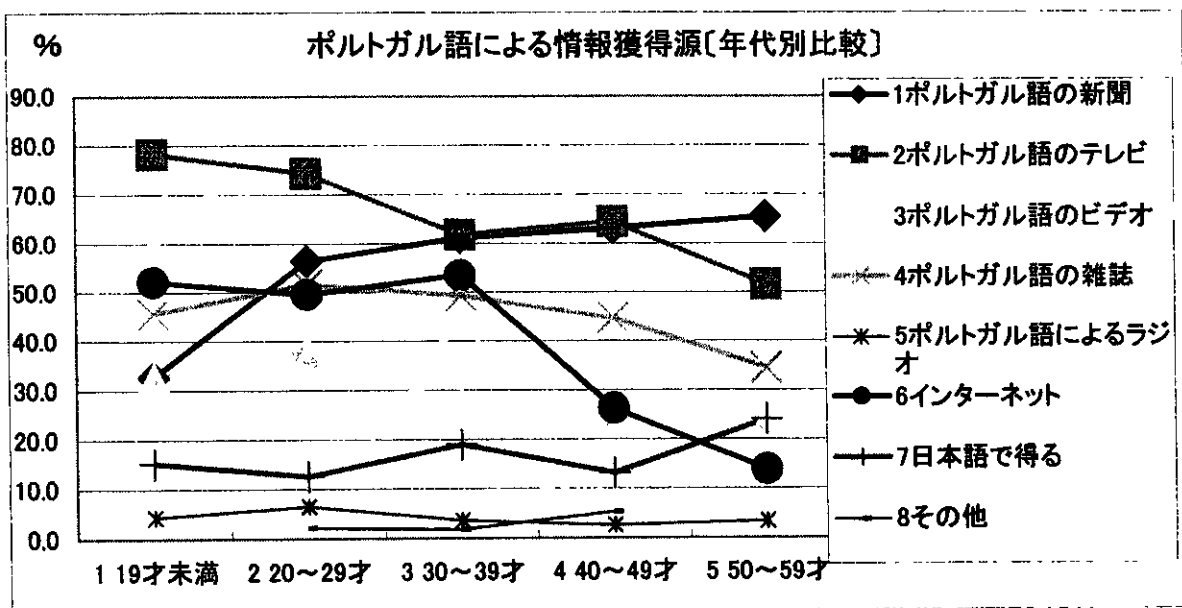
(表の 5)

	件数	%
ポルトガル語の新聞	322	57.6
ポルトガル語のテレビ	380	68.0
ポルトガル語のビデオ	174	31.1
ポルトガル語の雑誌	272	48.7
ポルトガル語によるラジオ	27	4.8
インターネット	255	45.6
日本語で得る	85	15.2
その他	12	2.1
不明	4	
サンプル数 (%ベース)	563	559

(図の 1: 2002年 HIV/Aids/STD 関連の知識・行動調査。サンプル数 559)



(図の2: 2002年 HIV/Aids/STD 関連の知識・行動調査。サンプル数 559)

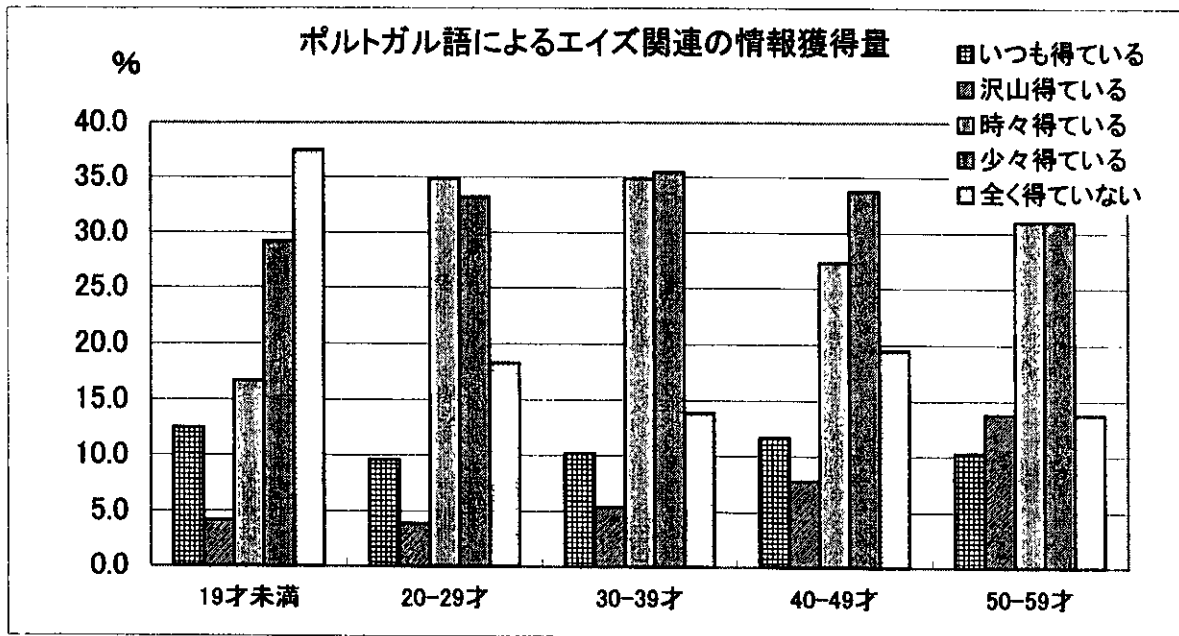


「HIV 関連の情報の獲得状況」

HIV に関する情報の獲得量に関しては、ポルトガル語による HIV 関連の情報を「いつも」得ていると答えた人は全体で約 12%であった。年齢が高くなるにつれ「少々」、「時々」そして「たくさん」得ている人は増えて、年

齢が若いほど「全然」得ていないと答えた人が多く、1 若い人ほど獲得量が少ないことが示され、「全然情報が無い」と答えた人で 19 才未満では約 37%であった (図の3)。

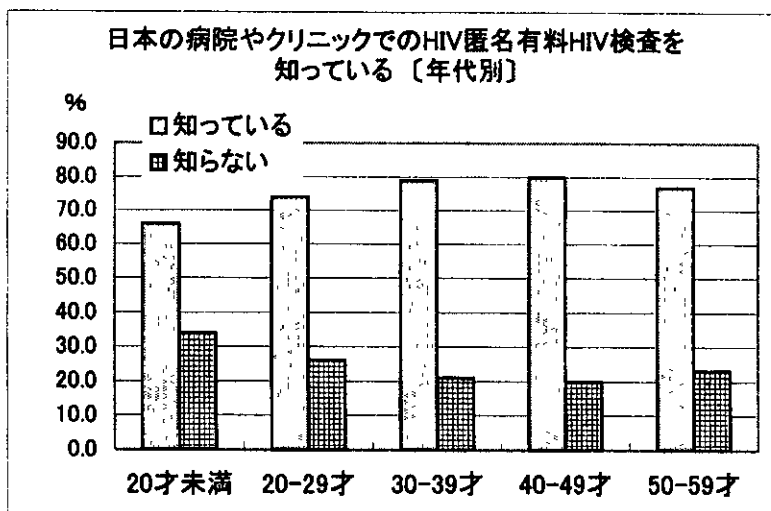
(図の3: 2002年 HIV/Aids/STD 関連の知識・行動調査。サンプル数: 559)



「日本における HIV 検査サービスの認知度」  
 日本における HIV 抗体検査サービスの認知  
 に関しては、「クリニックや病院で HIV 検査が  
 受けられる」の認知度は滞在期間が長いほど、  
 認知度が高く、また、年齢が高くなるほどそ  
 の認知度が上昇する傾向が見られる (図の 4、  
 5)。  
 また、「保健所での匿名無料 HIV 検査サービ

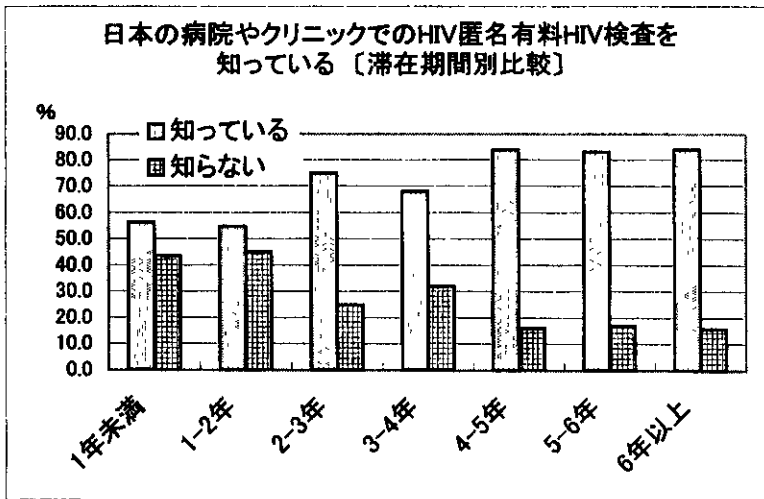
ス」に関しては、滞在期間が長くなるにつれ  
 認知度が上昇する傾向が示され、そして、「保  
 健所」そのものの認知度も上昇していること  
 が明らかになる (図の 6)。そして、40 代くら  
 いまでは年齢が高くなるにつれ認知度も上昇  
 し、「保健所」そのものの認知度も上昇傾向が  
 見られるが、50 代では両方とも低下している  
 (図の 7)。

(図の 4)

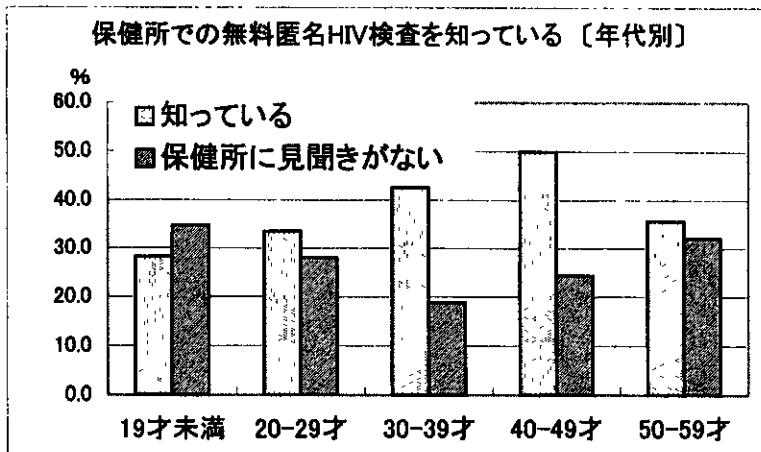


(図の 5)

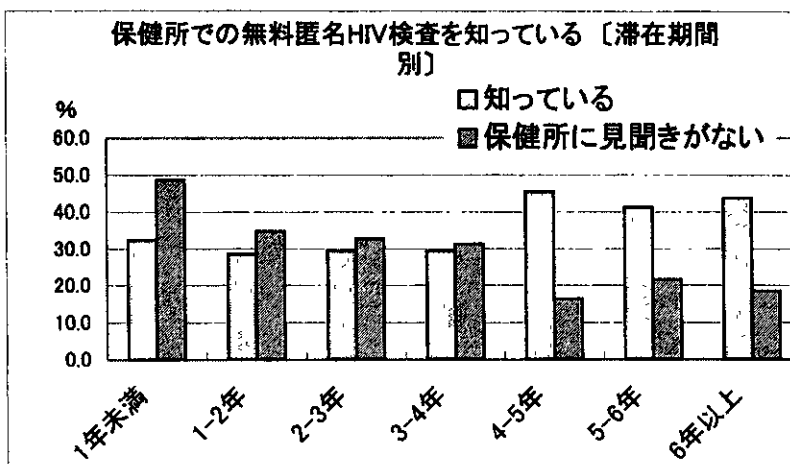




(図の6)



(図の7)



「HIV/STD 関連の知識」

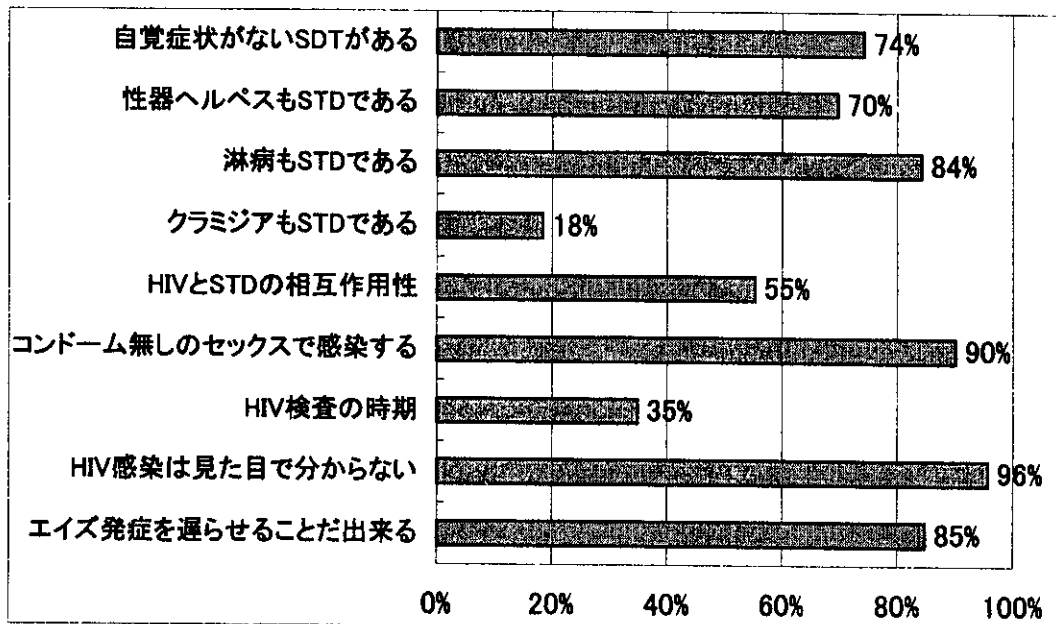
HIV/STD 関連の知識について、全体的に「延命治療が可能」、「健康そうでも HIV に感染している可能性がある」、「HIV はコンドーム

を使わない性交渉で感染する可能性がある」、そして「淋病も STD の一つである」などの項目についてに関しては正解率が 84% を上回った。また、「自覚症状の無い STD が

ある」そして、「性器ヘルペスも STD の一つである」については、正解率は70%以上であった。しかし、「STD と HIV の相互作用性」についての正解率は55%で、「感染危険の日から3ヶ月経ってからしか HIV 検査の結果

は正確ではない」と言う項目に対しての正解率は35%、そして、「クラミジアも STD の一つである」については、正解率が18%であった。〔図の8〕

(図の8)



「日本での HIV 抗体検査の経験」

日本での HIV 対応検査の経験について、女性では約 19%が受けたことがある、そして男性では約 12%が日本で HIV 抗体検査を受けている。

「コンドーム使用状況」

コンドーム使用に関しては「過去1年間に於ける最後の性交渉の時にコンドームを使ったか」と言う質問に対し、特定(レギュラー)

セックスパートナーがいた回答者のうち、45.9%が最後の性交渉でコンドームを使ったと答え、非特定(カジュアル)セックスパートナーがいた回答者のうち、64.9%が最後の性交渉でコンドームを使ったと答えた。

そして、コンドームの使用頻度について、レギュラーパートナーとは約46.2%「使う：いつも+ほとんどいつも+半分以上」と回答し、カジュアルパートナーとは約69.7%が「使う」と回答した。〔表の6〕

〔表の6〕

2002年 HIV/Aids/STD 関連の知識・行動調査 「セックスパートナーとのコンドームの使用頻度」				
	ステディーパートナー		カジュアルパートナー	
	数	%	数	%
いつも	135	30.6	116	52.5
ほとんどいつも	61	13.8	38	17.2
半分以上	8	1.8	0	0
半分くらい	17	3.9	4	1.8
半分以下	25	5.7	9	4.1

めったに使わない	72	16.3	18	8.1
全然使わない	123	27.9	36	16.3

### 「セクシュアルネットワーク」

セクシュアルネットワークについては、「過去一年間のセックスパートナーの数」を聞いたところ、全体の平均が 2.27 人〔±1.35〕で

あった。男女別では、女性の「過去一年間のセックスパートナー」の平均数は 1.91 人〔±0.68〕であったのに対し、男性の平均数は 2.52〔±1.62〕であった（表の 7）。

（表の 7）

	女性		男性	
	件数	%	件数	%
0 人	44	20.6	42	13.7
1 人	154	72.0	189	61.8
2 人	11	5.1	31	10.1
3 人	3	1.4	15	4.9
4 人	0	0.0	7	2.3
5 人	2	0.9	10	3.3
6 人	0	0.0	2	0.7
7 人	0	0.0	1	0.3
8 人以上	0	0.0	9	2.9
サンプル数	229	214	322	306
平均値	1.91		2.52	

## 第 2 次介入方法

ブラジル政府と共同の企画により、在日ブラジル人コミュニティ向けのマスメディア予防介入パッケージを作成し、その中身は：冊子、ポスター、ブックマーカー、30 秒のテレビスポット、ラジオ向けのスポット、また、日本発行されているポルトガル新聞向けの広告 2 種類である。

### ① 日本での印刷物の配布

名刺サイズ冊子 4 万部を平成 14 年 11 月から配布を開始した。配布先は在日ブラジル人を対象としたイベント（まつり、ディスコパーティー、講演会、移動領事館など）および、彼らの「集まり場所」を中心に行っている。

この冊子の内容は、「セーファーセックスしましょう、いつもコンドームを使いましょう」をメインテーマに、「HIV/AIDS は何か」、「HIV の感染経路と予防方法」、「一般的な STD

の名前と主な症状」、「STD/Aids の関係性」、「ブラジル及び日本での HIV や STD の検査場所」、「コンドームの正しい使い方」、「日本のコンドームパッケージの一例と買求め場所」、「ブラジル及び日本の医療システムの説明」、「ブラジル及び日本における HIV 感染者の支援システムの紹介」そして「ブラジル及び日本における相談窓口の紹介」。

ポスターの内容は「日本ではそうブラジルとは違わないことがある、例えばエイズ。セーファーセックスをしましょう。コンドームをいつも使いましょう」と言う文句をアピールし、ブラジル製品雑貨・飲食店、ブラジル銀行、ブラジル大使館、ブラジル領事館、ブラジル人が利用する旅行代理店などに配布し、展示を依頼する予定。ポスターのトータル部数は 1,000 枚である。

ブックマーカー（しおり）は「コンドーム」をローマ字で紹介し、「日本または世界のどの国でもコンドームをいつも使いましょう。

日本語ではコンドームだよ。」というフレーズを表紙に、そして裏には日本で売られているコンドームのパッケージ一例の写真、そして「日本では健康保険に入ることが大変重要である」と言うこと、また、ブラジルと日本における相談窓口の電話番号が紹介されている。配布先は冊子と同様であり、トータル枚数は2千部である。

## ② テレビスポット

平成14年11月20日より30秒のテレビコマーシャルがポルトガル語の有料チャンネルIPTVで放送が開始された。当スポットは12月末まで、毎日2-3回放送、2003年1月は2日おきに2回、2月は3日間おきに1回、そして3月は1週間に1回くらいのペースで放送された。

テレビスポットの内容は「コンドームを使いましょう」がメイン・メッセージで、「ブラジルの薬局で日本人がコンドームを買い求めたい」そして「日本のコンビニでブラジル人が同じくコンドームを買い求めたい」、その2つの

場面で日本人がポルトガル語で、ブラジル人が日本語で「カミジンシャ、コンドーム」など言いながら一所懸命コンドームを買っている場面を見せ、「どの国にいてもコンドームをいつも使いましょう」というメッセージが伝わり、さらに「コンドーム」と言う言葉を認識させる。狙いはコンドームの求め場所と求め方の紹介である。

## ③ その他

日本で発行されているポルトガル語の週刊新聞2誌への広告及び日本におけるポルトガル放送のラジオ向けのスポットについては、既に完成しあるが、まだ日本に届いていないが、とどき次第、キャンペーンを継続する予定である。

## フォローアップ調査

マスメディアをとしての予防介入が終了次第、ベースライン調査と同じ場所を訪れ、アンケート調査を行う予定である。

## 2 [在日ブラジル人学校を対象とした、スクールベースパイロット予防介入] ※日伯プロジェクトを兼ねて

当研究は、在日ブラジル人学校を対象に最も適したHIV/STD関連予防プログラムを構築することを目的とする。

日本における在日ブラジル人向けの学校30校以上のうち約25校がブラジル政府文部省が認可されたプロジェクトに入っている。その内、約10校が高校までの教育を行っている。スクールベース予防介入の対象者は中学校1年生から高校3年にあたる、10歳から18歳くらいまで生徒であり、その数は中学校の生徒が約400人、そして高校生が約150人である。

研究デザインは、one group pre and post test comparison方法、つまり、予防介入の対象校において、介入前に調査を行い、介入を実施、また、介入後にフォロー調査を行い、そして、介入の効果を計る、と言うデザインを用いる。当パイロット介入においては、ワークショップ及び、講演会を用いて介入を実

施した。

## ワークショップを用いての予防介入

平成14年9月5日から10月17日の間、岐阜県大垣市のHG校の中学校1年生から高校2年生（高校3年生存在せず）の生徒を対象にワークショップを用いた予防介入を実施した。

## 予防介入の準備

予防介入の準備期間は平成14年6-8月で、学校との話し合い（研究方法、介入方法と内容、介入の日時の調整など）、生徒の両親の理解を求める為、プログラムの説明文、子供が参加できる為の承諾書、親を対象に簡単なアンケート調査を行った。親を対象としたアンケート調査は両親のどちらかが回答するもので、回答者の「性別」、「学歴」、「滞在期間」、

「宗教」、「子供と話合ったテーマ、年齢とその頻度：HIV、STD、生理、妊娠、恋人を持つこと、セックス、ドラッグ、セーフアセックス、コンドーム、避妊法、その他」、「普段、両親のどちらが話すか」、「回答者自身が子供に話しづらいと思うテーマ、その理由」、「子供に対し関連な話をするにあたって最も適している人は誰か」、「回答者自身が思春期の時、自分の親と関連のお話をしたか」、「回答者自身性、セクシュアリティについてどのようなメッセージを聞いたか」、「自分の子供が恋人をもっても良いと思う年齢：子供の性別によって」、「子供がセックスをしても良いと思う年齢：子供の性別によって」、「学校がセクシュアリティなどについて語る場を提供するに對し、どのように思うか」、「取り上げて欲しいテーマ」など、であった。

27名の親からアンケート調査の回答があり、28人が承諾書を返信した。承諾書を返信しなかった親には、学校側から電話で確認し、承諾を得て、相当する生徒全員がプログラムに参加することになった。

### ベースライン調査方法・結果

予防介入の1週間前にベースライン調査を

匿名、自記式アンケートを用いて調査を行った、内容は「HIV 関連の知識」、「感染者への態度」、「家庭の環境について」、「性への態度」、「性交渉の経験」、「コンドーム使用の経験と態度」、「ディスカッションしたいテーマ」などであった。アンケート調査票は、質問の数や言葉などを変えて年齢別に適したものを準備し、実施した。

同学年でも年齢の差があり、また、学校の先生達の判断により、3つのグループに分けベースライン調査を行った：Aグループは11歳用のアンケート調査票、Bグループは12-13歳用のアンケート調査票、そして、Cグループは14-17歳用のアンケート調査票を受け取り、回答した。

各アンケート調査票の回答人数はAグループが11人、Bグループが19人、そしてCグループが16人であった。

介入前後におけるアンケート調査票のマッチング方法としてシールを用いて行った。

全体の年齢は、11歳から18歳で、女子が27人、男子が19人であった。グループ別の結果は次のとおりであった：

[構成] 学年、年齢及び性別については次のとおりであった：

	Aグループ (回答数:11)	Bグループ (回答数:19)	Cグループ (回答数:16)
「学年」	5年生-8人、6年生-3人	5年生-1人、6年生-9人、7年生-9人	5年-1人、6年-2人、7年-1人、8年-8人、高1年-2人、高2年-2人
「年齢」	11歳-5人、12歳-6人	11歳-1人、12歳-4人、13歳-10人、14歳-4人	14歳-6人、15歳-6人、16歳-2人、17歳-1人、18歳-1人
「性別」	女子-7人、男子-4人	女子-11人、男子-8人	女子-9人、男子-7人

[滞在期間] 対象生徒の滞在期間は全体的に長く、1ヶ月が最も短い期間で、11年が最も長い滞在期間であった。その内訳は次のとおりである：

Aグループ (有答数:11)	Bグループ (有答数:18)	Cグループ (有答数:16)
----------------	----------------	----------------

「1年未満」	0人	2人(11.1%)	0人
「1-2年」	1人(9.1%)	3人(16.7%)	2人(12.5%)
「2-3年」	3人(27.3%)	1人(5.6%)	3人(18.5%)
「3-4年」	2人(18.2%)	2人(11.1%)	1人(6.3%)
「4-5年」	0人	3人(16.7%)	1人(6.3%)
「5-6年」	2人(18.2%)	1人(5.6%)	3人(18.5%)
「6年以上」	3人(27.3%)	6人(33.3%)	6人(37.5%)

【性・セクシュアリティについての見聞き】 性やセクシュアリティについては年齢の低いグループにはその量のみについて、そして、年齢の高い生徒には誰と話しているかを尋ねたところ、Aグループでは「少々した」が5人、その次「結構した」が4人で、全体的性関連のお話していることが分かった。(表の8)

年齢の高いグループでは、全体「母親」と話す人が最も多く、次に「学校の友達」、さらに、Cグループでは「学校以外の友達」と性関連のお話をしていることが分かった。(表の

9)

【性関連の情報源】 性・セクシュアリティ関連の情報源として、全体的に「テレビ」が最も多く挙げられ、次に「学校」という回答が得られた。また、年齢が高くなるにつれ、「新聞」や「雑誌」を情報源としている生徒が増加している。(表の10)

(表の8)

【性・セクシュアリティについて何か聞いたことがあるか】	
Aグループ (有答数:11)	
「全くない」	1人(9.1%)
「少々ある」	5人(45.5%)
「結構ある」	4人(36.4%)
「分からない」	1人(9.1%)

(表の9)

【次に人たちと性・セクシュアリティについて話をしたか】 (沢山+少々)		
	Bグループ (有答数:18)	Cグループ (有答数:15)
「母親」	17人(94.5%)	12人(85.7%)
「父親」	9人(50.0%)	4人(28.5%)
「兄弟」	6人(42.9%)	5人(41.7%)
「学校友達」	16人(84.3%)	15人(100%)
「学校以外友達」	11人(61.1%)	11人(78.6%)
「学校先生」	13人(72.2%)	10人(76.9%)

(表の10)

【性・セクシュアリティについての情報源について】			
	Aグループ (有答数:11)	Bグループ (有答数:19)	Cグループ (有答数:16)

「テレビ」	3人(27.3%)	13人(68.4%)	14人(87.5%)
「雑誌」		9人(47.4%)	15人(93.8%)
「新聞」		3人(15.8%)	8人(50.0%)
「インターネット」		7人(36.8%)	7人(43.8%)
「友達」	4人(36.4%)	9人(47.4%)	10人(62.5%)
「母親」	5人(45.5%)	9人(47.4%)	9人(56.3%)
「父親」	1人(9.1%)	6人(31.6%)	4人(25.0%)
「学校」	5人(45.5%)	13人(68.4%)	12人(75.0%)

[エイズ関連の情報獲得量及び入手手段]  
エイズ関連の情報獲得量について、年齢が高くなるにつれその量が増加していることが分かる。「エイズ関連の情報をどのくらい得ていますか」の質問に対し、「結構ある」を見ると、

Aグループが27.3%、Bグループが47.4%、そしてCグループが68.8%である。(表の11)

また、その情報の入手手段として「テレビ」が最も多く挙げられた。(表の12)

(表の11)

[エイズについて何か聞いたことがあるか]			
	Aグループ(有答数:11)	Bグループ(有答数:19)	Cグループ(有答数:16)
「全くない」	1人(9.1%)	1人(5.3%)	1人(6.3%)
「少々ある」	7人(63.6%)	9人(47.4%)	4人(25.0%)
「結構ある」	3人(27.3%)	9人(47.4%)	11人(68.8%)

(表の12)

[エイズについての情報源]			
	Aグループ(有答数:11)	Bグループ(有答数:18)	Cグループ(有答数:16)
「テレビ」	6人(54.5%)	17人(94.4%)	14人(87.5%)
「雑誌」	3人(27.3%)	10人(55.6%)	12人(75.0%)
「新聞」		5人(27.8%)	7人(43.8%)
「インターネット」		8人(44.4%)	6人(37.5%)
「友達」	3人(27.3%)	10人(55.6%)	10人(62.5%)
「父親」		8人(44.4%)	5人(31.3%)
「母親」	3人(27.3%)—両親	12人(66.7%)	9人(56.3%)
「兄弟」		2人(11.1%)	3人(18.8%)
「学校」	6人(54.5%)	10人(55.6%)	10人(62.5%)

[HIV関連の知識] HIV関連の知識について、全体的に「延命治療」に関する知識が低く、HIV 主な感染経路についての知識は比較的高

いものであった。BとCグループを対象には避妊ピルについての質問も含まれ、その正解率は低いものであった。(表の13)

(表の13)

[HIV関連の知識に関する正解率]			
	Aグループ(有答数:11)	Bグループ(有答数:18)	Cグループ(有答数:16)

エイズはまだ完治できない	36.4%(4人)	27.8%(5人)	81.3%(13人)
HIVに感染していても長く生きられる	27.3%(3人)	0.0%	12.5%(2人)
性交渉を通してHIVに感染する可能性がある	81.8%(9人)	100.0%(18人)	93.8%(15人)
スプーンやフォークではHIVに感染しない	90.9%(10人)	83.3%(15人)	87.5%(14人)
頬にキスではHIVに感染しない	90.9%(10人)	83.3%(15人)	68.8%(11人)
性交渉で他の病気にもかかる可能性がある	72.7%(8人)	61.1%(11人)	75.0%(12人)
避妊ピルはHIV感染予防にもなる		33.3%(6人)	62.5%(10人)

[ワークショップで取り扱って欲しいテーマ]  
ワークショップで取り扱って欲しいテーマについては、全体的に「性交渉」が最も多く、その次、年齢(グループ)によって差はあったが、「HIV/AIDS/STD」について、「思春期」

などであった。最も沢山の項目を選んだグループは12から13歳のであり、最も少なく選んだのは14から17歳のグループであった。(表の14)

(表の14)

[予防プログラムで取り扱いたいテーマ(複数回答可)]			
	Aグループ(有答数:11)	Bグループ(有答数:19)	Cグループ(有答数:13)
「出産」	45.5%(5人)	52.6%(10人)	15.4%(2人)
「妊娠」	45.5%(5人)	78.9%(15人)	46.2%(6人)
「母・父親になること」	45.5%(5人)	63.2%(12人)	38.5%(5人)
「誰かを好きなる」	54.5%(6人)	78.9%(15人)	38.5%(5人)
「性交渉」	72.7%(8人)	78.9%(15人)	69.2%(9人)
「避妊方法」	36.4%(4人)	57.9%(11人)	53.8%(7人)
「HIV/Aids」	63.6%(7人)	89.5%(17人)	61.5%(8人)
「STD」	27.3%(3人)	84.2%(16人)	69.2%(9人)
「思春期」	63.6%(7人)	73.7%(14人)	61.5%(8人)

## 介入方法

予防介入は、事前のアンケート調査における対象者と同じグループ分けが行われ、年齢別に3つのグループを対象に予防介入を行った:Aグループ(11-12歳)、Bグループ(12-13歳)そして、Cグループ(14-17歳)。各グループにファシリテーター2名を配置して行った。

対象者の年齢は11歳が6人、12歳が10人、13歳が11人、14歳が10人、15歳が6人、16歳が2人、17歳が1人、18歳が1人、そして、19歳が1人であった。

Aグループ - 4セッション、1時間、物語を中心、宿題

Bグループ - 4セッション、2時間、グ

ループダイナミックスを中心、講演、宿題  
Cグループ - 4セッション、2時間半、グループダイナミックスを中心、講演、宿題

<ワークショップの内容> ワークショップはセクシュアリティに重点をおいて下記のテーマについてディスカッションをし、話し合いを行った:

「個人にとっての大切なもの、考え-values」

- セルフエスチームの向上、自分にとって大切なものは他人と違うことに気付きさせ、互いに違う価値観の尊重感を育てるのを目的とした。

「セクシュアリティについて」 - セクシュアリティは性交渉のみではなく、人を好きなる、人を尊重する、自分の性ア



アイデンティティーを構築する、違う性アイデンティティーを尊重しあう、などについて感受性を育むのが目的であった。「私たちの体を認識して」 - 思春期に伴う体の変化・発見、女の子の体、男の子の体、互に知って、語り合える環境を作る、自分の体を十分に認識し、健康を求め、保つことについて感受性を育むのが目的であった。

「思春期の妊娠について」 - 妊娠・出産、今の年齢での妊娠・出産はどのような影響を与えるのか、出産と子育てに伴うコスト（精神、金銭、時間）など、避妊方法などについて話し合い、感受性を育むのを目的とした。

「ジェンダーについて考えましょう」、「私と社会：社会及び、環境の影響について考えましょう」 - 社会がどのように自分の考え、価値観や偏見の構築に影響をしているのか、社会が決めている“男”、“女”とは、そのジェンダーアンバランスに伴う Vulnerability などについて話し合い、自分の将来像を広く描ける様を狙うテーマであった。

「HIV/AIDS/STD について認識しましょう」、「予防活動について」、「コンドームについて」 -

HIV/AIDS/STD について正確な情報を得る、予防方法および、自分が出来る予防活動、コンドームの使い方などについて情報提供及び、話し合うことを目的とした。コンドームについては、A グループは紹介のみ、B グループはファシリテーターによるデモンストレーション及び、自由にやってみたい生徒に模型を使って体験させた、そして、C グループは全員が一緒に参加するデモンストレーション及び

体験を行った。

ワークショップへの参加率はほぼ 100%であったが、途中で B グループから C グループに変更した生徒が 2 名、また、途中で退学になり、また入学した生徒が 1 名、途中で入学した生徒が 2 名、など、生徒の移動が目立った。また、学校の行事により、2 日間のセッション中が中断・再開され、また、行事ともなっており、生徒がその日のセッションの前半のみに参加するなど、出来事があった。

### フォローアップ調査の結果

フォローアップ調査はワークショップ終了の 2 週間後に行った。フォローアップ調査もアンケート調査のみ行われ、基本的にベースラインと同じ内容であったが、「家庭の環境」、「ディスカッションしたいテーマ」、などを省き、いくつか自由記載欄を設けた「考え方の変化について」、「学んだこと」、「セクシュアルヘルスとは」、「評価点数」、「好きだったこと」、「嫌いだったこと」、「自由評価」などであった。

回収率は 100%で、介入前後の回答者数の差は生徒の移動や新入学、退学などのため表れたものである。下記、HIV 関連の知識に関する結果のみについて報告する。

[HIV/AIDS/STD 関連の知識における正解率] HIV 関連の知識について、全体的に正解率が上昇し、最も知識の認知度が上昇したグループは B であった。(表の 15)

(表の 15)

A グループ [HIV 関連の知識についての正解率]			
	介入前 (有答数:11)	介入後 (有答数:12)	上昇率

エイズはまだ完治できない	36.4%	50.0%	13.4
HIVに感染していても長く生きられる	27.3%	41.7%	14.4
性交渉を通してHIVに感染する可能性がある	81.8%	91.7%	9.9
スプーンやフォークではHIVに感染しない	90.9%	83.3%	-7.6
頬にキスではHIVに感染しない	90.9%	100%	9.1
性交渉で他の病気にもかかる可能性がある	72.7%	75.0%	2.3
<b>Bグループ [HIV関連の知識についての正解率]</b>			
	介入前(有答数:18)	介入後(有答数:17)	上昇率
エイズはまだ完治できない	27.8%	70.6%	42.8
HIVに感染していても長く生きられる	0.0%	17.6%	17.6
性交渉を通してHIVに感染する可能性がある	100.0%	88.2%	11.8
スプーンやフォークではHIVに感染しない	83.3%	100.0%	16.7
頬にキスではHIVに感染しない	83.3%	94.1%	10.8
性交渉で他の病気にもかかる可能性がある	61.1%	70.6%	9.5
避妊ピルはHIV感染予防にもなる	33.3%	64.7%	31.4
<b>Cグループ [HIV関連の知識についての正解率]</b>			
	介入前(有答数:16)	介入後(有答数:18)	上昇率
エイズはまだ完治できない	81.3%	88.9%	7.6
HIVに感染していても長く生きられる	12.5%	66.7%	54.2
性交渉を通してHIVに感染する可能性がある	93.8%	88.9%	-4.9
スプーンやフォークではHIVに感染しない	87.5%	94.4%	6.9
頬にキスではHIVに感染しない	68.8%	94.4%	25.6
性交渉で他の病気にもかかる可能性がある	75.0%	77.8%	2.8
避妊ピルはHIV感染予防にもなる	62.5%	77.8%	15.3

### 講演会を用いた予防介入

講演会を用いた予防介入は静岡県浜松市のAS学校にて11月20日に行った。予防介入の形は学校側の希望であり、事前に電話のみの交渉が行われた。また、学校の行事として講演会が行われた為、生徒の両親への説明、講演会に参加する為の承諾書などは行われなかった。

### ベースライン調査方法・結果

講演会の1週間前にAS学校の中学校5年生から高校3年生までの生徒を対象にベースライン調査をアンケートのみを用いて調査を行った。アンケート調査は無記名自記式、内容はワークショップによる予防介入を行った学

校の同様なものを用いて、「HIV関連の知識」、「感染者への態度」、「家庭の環境について」、「性への態度」、「性交渉の経験」、「コンドーム使用の経験と態度」、ディスカッションしたいテーマなどであった。また、介入前後のマッチング方法として、誕生日の記入を用いて行った。

ワークショップにおける予防介入と同様、対象年齢に応じて質問数や表現などを変え3つのアンケート調査を準備した。

実施方法は、学校の教員においてアンケート調査が実施され、回収後に調査員に郵送にて届けた。尚、調査実施の段階では同じクラスに2種類のアンケート調査が使用されたこともあった為、クラス別ではなく、3つのグループに分類した:Aグループ-11歳用のアンケート調査票の回答者、Bグループ-12-13歳

用のアンケート調査票の回答者、そして、Cグループ：14-17歳用のアンケート調査票の回答者。

回答者数は11歳用アンケート調査票が7

人、12-13歳用のアンケート調査が29人、そして14-17歳用のアンケート調査票が35人であった（合計71名）。内、36人が女子で、35人が男子であった。

〔構成〕 学年、年齢及び性別については次のとおりであった：

	Aグループ (回答数:7)	Bグループ (回答数:29)	Cグループ (回答数:35)
「学年」	5年生-7人	5年生-8人、6年生-12人、7年生-3人、8年生-1人、高1年-1人	3年生-1人、4年生-1人、6年生-1人、7年生-8人、8年生-10人、高1年-8人、高2年-5人、高3年-1人
「年齢」	11歳-6人、12歳-1人	11歳-1人、12歳-11人、13歳-17人	14歳-17人、15歳-9人、16歳-7人、17歳-2人、
「性別」	女子-5人、男子-2人	女子-14人、男子-15人	女子-17人、男子-18人

〔滞在期間〕 対象生徒の滞在期間は全体的に長く、1ヶ月が最も短い期間で、10年が最も長い滞在期間であった。その内訳は次のとおりである：

	Aグループ (有答数:7)	Bグループ (有答数:29)	Cグループ (有答数:35)
「1年未満」	0人	4人(13.8%)	1人(2.9%)
「1-2年」	2人(28.6%)	6人(20.7%)	2人(5.7%)
「2-3年」	0人	2人(6.9%)	6人(17.1%)
「3-4年」	0人	2人(6.9%)	1人(2.9%)
「4-5年」	0人	3人(10.3%)	3人(8.6%)
「5-6年」	1人(14.3%)	2人(6.9%)	7人(20.0%)
「6年以上」	4人(57.1%)	10人(34.5%)	15人(42.9%)

〔性・セクシュアリティについての見聞き〕 性やセクシュアリティについては11歳用のアンケート調査回答者では「少々ある」と回答した生徒が最も多く、71.4%であった。（表の16）

12-13及び14-17歳の回答者では、「学校の友達」が最も多い話し相手で、次に「母親」や「学校以外の友達」などが挙げられていた。

（表の17）

〔性関連の情報源〕 性・セクシュアリティ関連の情報源として、全体的に「テレビ」が最も多く挙げられ、次に年齢の高い生徒では「雑誌」などが挙げられていた。（表の18）

（表の16）

〔性・セクシュアリティについて何か聞いたことがあるか〕	
Aグループ (有答数:7)	
「全くない」	0人
「少々ある」	5人(71.4%)
「結構ある」	2人(28.6%)
「分からない」	0人

(表の 17)

[次に人たちと性・セクシュアリティについて話をしたか] (沢山+少々)		
	B グループ	C グループ
「母親」	19 人 (82.6%) (有答数:23)	25 人 (78.1%) (有答数:32)
「父親」	18 人 (78.3%) (有答数:23)	17 人 (53.1%) (有答数:32)
「兄弟」	3 人 (18.8%) (有答数:16)	12 人 (44.4%) (有答数:27)
「学校友達」	23 人 (92.0%) (有答数:25)	30 人 (93.8%) (有答数:32)
「学校以外友達」	18 人 (78.3%) (有答数:23)	11 人 (78.6%) (有答数:32)
「学校先生」	12 人 (52.2%) (有答数:23)	22 人 (70.9%) (有答数:31)

(表の 18)

[性・セクシュアリティについての情報源について]			
	A グループ (有答数:7)	B グループ (有答数:29)	C グループ (有答数:34)
「テレビ」	5 人 (71.4%)	27 人 (93.1%)	28 人 (82.4%)
「雑誌」		19 人 (65.5%)	24 人 (70.6%)
「新聞」		10 人 (34.5%)	15 人 (44.1%)
「インターネット」		15 人 (51.7%)	14 人 (41.2%)
「友達」	3 人 (42.9%)	17 人 (58.6%)	21 人 (61.8%)
「父親」	1 人 (14.3%)	16 人 (55.2%)	10 人 (29.4%)
「母親」	3 人 (42.9%)	17 人 (58.6%)	16 人 (47.1%)
「学校」	2 人 (28.6%)	12 人 (41.4%)	19 人 (55.9%)

[エイズ関連の情報獲得量及び入手手段]  
エイズ関連の情報獲得量について「結構ある」と回答した人が、Aグループで66.7%、Bグループで55.2%、そしてCグループでは77.1%であった。(表の19)

また、その情報の入手手段として「テレビ」が最も多く挙げられた、次に雑誌であった。「友達」を情報源としている人は半分程度であった。(表の20)

(表の 19)

[エイズについて何か聞いたことがあるか]			
	A グループ (有答数:6)	B グループ (有答数:29)	C グループ (有答数:35)
「全くない」	0 人	0 人	0 人
「少々ある」	2 人 (33.3%)	13 人 (44.8%)	8 人 (22.9%)
「結構ある」	4 人 (66.7%)	16 人 (55.2%)	27 人 (77.1%)

(表の 20)

[エイズについての情報源]			
	A グループ (有答数:6)	B グループ (有答数:29)	C グループ (有答数:35)